

文部科学大臣奨励賞

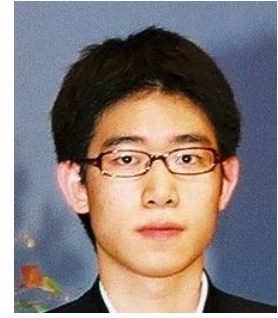
「心のスイッチを押してください」

ミン テイル

Mr. MIN Taiil

(韓国・高校生・養生高校 [韓国])

韓国のソウル在住の高校3年生。カルチャーショックや言語障害などについて興味を持っており、高校卒業後は大学にて日本語と心理学を専攻したい。将来の目標は、児童心理学者や言語治療士になること。



今日から2週間ほど前、ぼくは18番目の誕生日を迎えました。今年は、毎年恒例の家族パーティのほか、社会からも大きなプレゼントをもらいました。それは、「18歳未満は禁止」の札を外してくれたことです。感動です！別にいやらしいことではなく、自分が一歩おとなに世界に踏みこんだ気がしてうれしいのです。「大人入門の日」とでも言っておきましょう。

さて、ぼくにはもうひとつ、忘れられない誕生日があります。日本で迎えた4才の誕生日のことです。ぼくにとって「日本入門の日」でした。一番古い記憶のはずなのに、ぼくはその日のことを今でも鮮明に覚えています。引っ越して間もないので、家のあちこちに置かれていた段ボール箱、ケーキ屋がどこかわからないので、しかたなくコンビニで買ったミニケーキ、そして父と母からのプレゼント。なんとプレゼントはカセットテープとプレーヤーでした。テープは「韓国昔話セット」というもので、韓国の古くから伝わる昔話が百二十話も収録されたものでした。幼すぎるぼくがこれから日本で暮らすことによって、韓国の言葉や文化を忘れてしまうのではないかという親の配慮が込められたプレゼントでした。日本での6年間、ぼくは每晚そのテープを聞きながら眠りにつきました。

帰国してからはCDプレーヤーを買って、主に音楽を聞くようになりました。それに、ぼくにとっては昔話を聞くより現実世界への適応が重要でした。単純に「自分の国の学校に通える」という期待を抱いて登校したぼくの気持ちは、一日にして驚きと不安に変わったのです。

「うわ、なんだおまえ、そのうわばき！日本ではみんなそんなの履いてんの？」

「おまえさ、もっと自分の意見はっきり言えよ。何考えてのかわかんないぞ」

ぼくにとって当たり前の服装や態度が、韓国の子供たちには不思議だったり気に入らないみたいでした。上履きなどはすぐに買い替えればよかったのですが、指摘された自分の態度や性格はどうすればいいのかわからなくて混乱していました。

そんなある日、まだ開けてない引っ越しの荷物箱を広げていたら、日本で使っていたカセットプレーヤーがありました。ついこの前まで聞いていたのにひどく懐かしく感じられました。コンセントに差し込んでプレイボタンを押すと、また懐かしい声が出てきます。途中からでしたけど、ぼくはそれがどの物語のどの部分かすぐわかりました。巻き戻しボタンを押すと、ウィーンと飛行機が離陸するときのような大きな音をたてて急速にまわります。「あれ？こんなに速かったっけ？」と思った瞬間、「パチン！」と鋭

い音を立てながらプレーヤーは止まってしまいました。慌てて母に説明すると、「それ 110 ボルト専用でしょ？トランス使わなかったからヒューズが飛んじやったのよ」と言われました。「あっ！ そうか！」と気づいたときはもう遅く、壊れてしまいました。なんとか直せないとあちこちいじりながら知ったのですが、それは 110 ボルトにも 220 ボルトにも変換できるもので、スイッチをちょっと上に動かせば壊れずに済んだのです。ぼくはそのスイッチに気づいた瞬間、ハッと悟りました。「ぼくもスイッチを入れ替えるべきなんだ」と。

「このままの自分をブレし続ければ、いつか心のヒューズが飛んでしまうかも知れない」と。

そしてぼくはみんなの行動をよく観察し、彼らが求める理想の友だちに近づこうと心掛けました。彼らにとってぼくの遠慮深さは水臭く、他人に選択権を与える心掛けは優柔不断に感じられるようでした。どのスイッチを押せばいいのかわかったぼくは、自分を変えることに全力を尽くしました。そして、1 ヶ月後にはほとんどのクラスメートと仲よしになり、彼らをリードできるようになって、次の学期でぼくは学級委員に選ばれました。

中学生になって、日本から帰国した友だちの集まりがありました。そこで、学年、男女問わず全員がぼくと同じような悩みを抱えていたことを知りました。そのうち一人の友人は、ショックが大きかったらしく、一言も喋れない「失語症」になってしまったそうです。「ヒューズが飛んでしまったんだ！」と、ぼくは考えました。この時はじめてぼくはスイッチを自力で替えられない人がいるということを知りました。トランスがないと違う電圧でプレイできない機械があるように、国と国の仲介者がいないと違う文化に適應できない人がいるのです。父から聞いた話ですが、外国に派遣される場合、事前に会社でその国の社会文化や礼儀などについて教育を受けると言います。ぼくはそれが子供たちに必要だと思います。子供たちの世界も国によって文化や規則、美徳の基準が違うのです。

国際化が進展するにつれて、親と一緒に長い間を海外で生活する子供が増えてきています。二つ以上の国の文化を柔軟なマインドで受け入れた子供たちは、未来の貴重な人材になるでしょう。彼らを誰一人、道に迷わないようにするためには大人たちの導きが必要だと思います。ぼくはそんな子供たちを導く大人になりたいと、大人入門の日に決心しました。